たまっけ８３号

２０２２（令和４）年４月１５日発行

我孫子市
環境レンジャー通信

たまっけ

（発　行）
我孫子市環境レンジャー
（連絡先）
我孫子市手賀沼課
０４－７１８５－１４８４（直通）

「たまっけ」とは１９６０（昭和３５）年頃まで手賀沼でもたくさんすんでいたカラスガイのことです。今はほとんど見られません。環境レンジャーは、我孫子の自然環境を市民に伝え、市民と一緒に考え、守り育ててゆくために結成されました。みなさん、一緒に美しい我孫子を守り育てましょう。

≪ 特 集 ≫
我孫子市と手賀沼 ―戦国時代から江戸時代までの様子―

（ 環境レンジャー 渡邉 茂実 ）

１．戦国時代

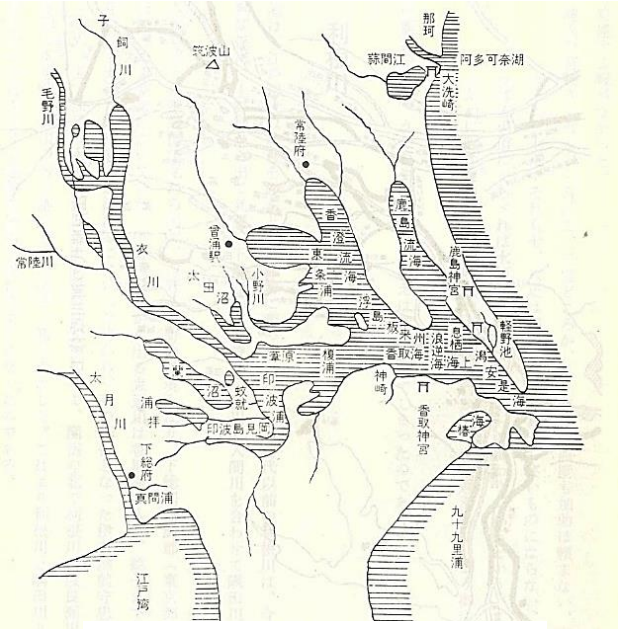
（１）このころの手賀沼周辺の様子

特集第３回目は戦国時代・江戸時代の様子にふれます。

江戸時代以前の相馬郡・葛飾郡・猿島郡などの下総一帯には、茫々とした沼地が広がっていました。衣川（鬼怒川あるいは絹川）は香取海に注いでいたと思われています。香取海は霞ヶ浦・印旛沼そして現在の利根川水系を含む大きな内海でした。その昔「古東京湾」と呼ばれていた地が隆起して出来たものと考えられています。

この広い沼地は平時から広々とした湖海だったわけではなく、芦葦が生い茂る沼地で一度豪雨にあうと、一面が大きな湖のようになり、手のつけられないほどの荒涼とした風景になりました。江戸時代以前には現利根川下流（関宿から銚子にかけて）一帯は、土地隆起によるもの以外は、ほとんど人工的に手を加えたものはなく、人々は従来の入江や砂州などで細々と漁労を兼ねた農耕を営み、牧草地で馬を飼って生活している状態でした。

この土地を開墾しようなどという考えは、誰にも起こりませんでした。かえって戦国時代には、複雑な地形をつくっていたことで、攻略が難しい要害のようなところとして重要な地だったと言えます。



香取海の概念図（吉田東五による）
引用「ふるさとあびこ」（湖畔情報社）

（２）戦国時代の土豪

前号で紹介した「相馬御厨（そうまみくりや）」内（開墾地を伊勢神宮に寄進し、その威光を背景として周辺からの侵略を防ぎ、実質支配をしていた。）で育った相馬氏・千葉氏一族は、室町時代にかけてそれぞれ勢力を伸ばしてきました。

それが、応仁の乱を経て戦国時代になると、我孫子でも在地の名を姓とする地侍が現れて、下克上の風潮が高まり勢力を競うようになります。小武士団を構成し丘陵地や台地に本拠地を築くと、領土の争奪戦を繰り返しました。根戸、我孫子、柴崎、芝原、新木、布佐などの小城址はこうした土豪達の城塁と考えられます。これらの土豪は戦国時代末期には、原氏や高城氏を介して小田原北条氏に服従していました。そのため 1590 年（天正 18 年）豊臣秀吉の小田原攻めによって北条氏が滅亡すると、その戦闘に参助していた我孫子地方の武将は、ほとんど討死するか山中に落ちのびたりして以後の消息を断っています。

２．江戸時代

天下統一を果たした豊臣秀吉は、関東八国を徳川家康にゆだね、以後下総の地はずっと徳川家の所領となり「将軍家の御膝元」と呼ばれて、譜代大名（直属の旗本や縁故大名）で固められました。こうした大名は佐倉 18 万石をのぞき大部分が 1～2 万石の小藩で、その他は他国大名の分領や、天領とよばれる幕府の直轄地、旗本の知行所、御家人の給地、寺社領地などが複雑に入りくんでいました。

（１）このころの我孫子

我孫子地方は、江戸の旗本の知行所が多く、細かく分割支配されていたようです。例えば、中里村・岡登戸村【酒井雅楽頭知行所】、下ケ戸村【本多伯耆守知行所】、古戸村・都部村【川口能登守知行所】、我孫子村【山高八左衛門知行所】、布佐村【本多豊前守代官所】などです。他は小身の旗本の知行所が多く、村には陣屋もなく、自分は不在領主として名主や有力者に行政をまかせきっていたようです。そのころの文献では、徳川時代の我孫子は幕府直轄の天領・旗本領をあわせて 433 石で、天保年間には戸数 100 軒、人口 500 人（延享年間の文書では戸数 145 軒）と記されています。当時の我孫子は農村として、また伝馬宿としての寒村で、資料によると村人の生活基盤は農業の他に、多くは宿場の人馬賃稼ぎや宿の手伝い、賃仕事などをしていたようです。

（２）宿場町・助郷

三代将軍家光の時代 1635 年（寛永 12 年）参勤交代の制度化で、江戸に通じる街道が整備されました。また江戸開幕後、幕府の親藩が水戸に封ぜられると、江戸と水戸が政治的に密接になり「脇街道」として呼塚（よばづか）を経る水戸街道（水戸道中や陸前浜街道ともいう）が盛んとなります。1695 年（万治 2 年）、我孫子は幕府の宿駅制度の新設にともなって宿駅に定められ、宿場町としてひらけました。宿駅とは定められた場所に一定の人馬を常備し、駄賃をとって人馬を提供する制度です。水戸街道で我孫子宿を通過する大名は、常陸・下総・奥羽地方の大名 22 家にのぼり、また知行所をもつ旗本などの通行がとても多く、常備の人馬では足りませんでした。そこで付近の農村から人馬を徴用しました。そのような課役を負う農村を「助郷（すけごう）」といいます。我孫子宿の助郷は、今の我孫子市内はもちろん、北は舟戸村、東は布佐村、南は柏村、西は大青田村など近郷 29 ケ村に及んでいました。交通量が増えるにつれて、助郷の課役は常時化し、助郷農村は疲弊し荒廃していきました。天下の人民の中でも助郷の民ほど苦しんだ者はいないと言われるほどで、各街道に沿う宿駅ではいたるところで、むしろ旗をかつぐ「助郷一揆」を起こしています。この過大な勤労奉仕は幕末のころまで続きました。一方で宿場がさびれていくのに反して、利根川水運の発達により利根川河岸は盛んになったのです。

（３）利根川東遷（とうせん）

利根川が現在の流路になったのは、300 年ほど前のことで、それまでは上流の埼玉県羽生市川俣付近から南流し、埼玉の古利根川筋を経て東京湾にそそいでいたのです。この川は一たん荒れだすと流域は酷い洪水の被害にあっており、江戸の東南部は特に激しい水害になりました。幕府は江戸を経営する政策上、利根川の流路を変更せざるをえなかったのです。それは従来の流れを、人口密度の少ない銚子方面へ付け替え、あわせて湿地帯であったこの地方を開拓し、年貢米の増収をはかることにしたのです。さらには舟運を発展させることで、米麦を大量に運搬できるようにするという大事業でした。これを「利根川東遷」といいます。

慶長年間（1596 年～1615 年）関宿の北側で利根川と渡良瀬川の間に逆川を掘り一筋の大河流として、江戸から離れた浦安で東京湾にそそぐようにしました。1621 年（元和 7 年）に逆川をさらに改修、1636 年（寛永 12 年）太日川を改修し、川幅を広げて大部分の利根川の水を東京湾に落とし、これを江戸川と呼びました。1654 年（承応 3 年）赤堀川を広げ利根川の水を鬼怒川に流すと、これ以降利根川は銚子にそそぐようになり、ほぼ現在の利根川本流をつくりあげました。これが完成したのは四代将軍家綱の時でした。

我孫子付近の改修工事はこれより少し早い 1630 年（寛永 7 年）に始まりました。取手市小文間の高丘を切って戸絶（戸台）とし、さらに布川と布佐一帯の高丘を切り開きいわゆる布佐新峡をつくり、利根の流れを手賀沼の排水口であった木下川へ落としたのです。

しかし流路を変更した川は必ず暴れるもので、今まであまり水害の無かった現利根川一帯の人々は途端に、度重なる水害に苦しむことになりました。今まで小川や湿地帯だったところへ、大量の水が一気に押し寄せるのですから、手のほどこしようがありませんでした。流域の農民は頻発する洪水を防ぐため、高い堤防を築くなど長い間精魂をつくしたのです。ちなみにその後、1786 年（天明 6 年）の大洪水から数えて 110 年後の 1896 年（明治 29 年）に河川法が制定され、4 年後の 1900 年（明治 33 年）に利根川の本格的な治水工事が国直轄で始まりました。

（４）利根川の河岸（かし）

利根川の流れが変わり、江戸の洪水が少なくなったかわりに、中利根川（関宿から木下にかけて）は数年毎に洪水にみまわれました。また、軍事上橋がほとんどかけられなかったため、水郷の米や九十九里の干鰯の輸送には、主に舟が利用されるようになりました。そうした舟の寄港地は河岸と呼ばれて、河岸には魚類・雑貨の荷揚げ場やセリ市場、廻船問屋、宿屋、茶屋などが立ち並んでいました。当時の船頭は収入が多く、船乗り気質で金遣いも荒く、おおいに賑わいました。中利根川では、木下・布佐・布川・取手・六軒堀・戸頭などの河岸が有名でした。布佐には今の栄橋から観音堂（なま街道の起点）にかけて船着き場がありました。江戸時代中期になると利根川は東北地方の物資や、水戸藩やその他諸藩内の産物を江戸へ送る幹線となりました。河川航路には高瀬舟が使われ、500 俵から 900 俵の米を積み、銚子から関宿経由で江戸へでていました。銚子沖でとれた鮮魚（なま＝いわし・さばなどの青魚）は夕刻銚子を出て、翌朝布佐河岸に荷揚げし、荷駄に積み替え馬で一気に松戸まで走らせました。さらに船便で行徳を経て江戸日本橋まで運んだのです。布佐から松戸までの道を「なま街道」といい、その起点となった観音堂には説明板があります。江戸時代後期には我孫子宿の衰退が目立ち、一方利根川で布佐河岸が賑やかさを増しましたが、こうした布佐河岸の賑わいも、明治 29 年の常磐線、同 31 年成田線の開通以降にわかに衰えました。

（５）手賀沼の干拓

江戸時代・三代家光のころ、幕府の財政強化のため沼沢の開墾と新田開発を奨励し、「土地を見つけ新田を開拓した者には、年貢の 1/10 を一生支給する」というお触れを出しました。江戸の豪商たちは、私財を投じて新田開発に乗り出しました。真っ先に目を付けたのが江戸に近い湿地や沼地で、手賀沼は明暦元年に干拓が始まりました。明暦 2 年海野屋作兵衛は竹袋・平岡・小林・笠神を結び手賀沼から印旛沼に達する排水路の掘削工事と弁天堀の拡張工事を行い、新田 230 町歩の開拓に成功しました。その後享保年間までに、度重なる洪水・堤防決壊で潰滅状態になってしまいました。享保年間に徳川幕府は大きな新田開発を計画し、享保 13 年、高田茂右衛門は布佐浅間台下から対岸の布施へ千間（約 1800m）の堤を築いて沼を上下の二部に分け、上沼の水を利根川へ、下沼の水を弁天堀から利根川の支流へ落とし、下沼に約 2 万石の新田を拓きました。そのころ、浅間台下井上氏の祖は独力で開墾にあたり、沼地百五十町歩を米田とし相島新田を拓きました。

近世の史実に残っている干拓事業は下表の通りですが、全部洪水や資金難などで潰滅・挫折しています。

時　代	沼　名	起業者	結　果
1656 年（明暦 2 年）	手賀沼	海野屋作兵衛	完成→水害→潰滅
1725 年（享保 9 年）	印旛沼	染谷源右衛門	資金難→挫折
1729 年（享保 13 年）	手賀沼・印旛沼	高田茂右衛門	完成→水害→潰滅
1784 年（天明 3 年）	手賀沼・印旛沼	田沼主殿頭	水害→挫折
1841 年（天保 11 年）	手賀沼・印旛沼	水野越前守	政変→挫折

しかし、その後も応急の小工事が何度も行われ、1794 年（寛政 6 年）ころの検地では手賀沼新田 7 地区で 2,679 石の高入地（納租地）を得たとあります。本格的な干拓ができたのは終戦後の昭和 20 年ころからになりますが、現在ある手賀沼沿岸の水田のほとんどは江戸時代に開拓されたものばかりで、根戸新田・我孫子新田・中里新田・岡発戸新田・相島新田など新田の地名をもつ地区もすべて手賀沼に接しています。

《参考文献》

「あびこ風土記」古谷治著（北総郷土研究会）、「ふるさとあびこ」中村脩著（湖畔情報社）、
「利根川読本」共著（崙書房）、「手賀沼の今昔」星野七郎著（崙書房）、「あびこ歴史散歩」(我孫子市教育委員会)

環境レンジャー活動報告（環境学習）
環境工作バードフィーダー作り

（ 環境レンジャー渡邉 茂実 ）

12/11（土）13:00 から 14:30 まで、水の館研修室で「バードフィーダー作り」を開催しました。環境工作でのバードフィーダー作りは 4 回目となります。今回はコロナ対策のため、参加者 9 名（内児童 5 名）、環境レンジャー6 名、市職員 1 名と小規模の開催となりました。バードフィーダーは、私達人間にとっては、野鳥を観察するためのアイテムということができます。しかし、野鳥にとっては定期的に御馳走を食べられるレストランのような存在です。ですから、野鳥が気持よく、健康的な食事を提供することが大事です。他の動物に狙われない安心できる場所で、自宅の庭などの目の届くところに設置すること。細菌の発生を防ぐため、雨などに濡れたら新鮮な餌に交換してあげること。やりすぎは生態系にも影響するので、餌の少ない時期を選ぶこと、などを心がけます。餌はヒマワリの種（小粒）を使いましたが、殻つきの穀物でもかまいません。

注意事項・作り方等の説明の後、早速作成に取り掛かりました。材料は使用済みのペットボトルと牛乳などの紙パックです。作り方の決まりは特にはありません。ペットボトルは止まり木になる割りばしの穴をあけて、割りばしを 2 本十字の形に差し込み、餌をついばむ穴を開け、つり紐をつけ、底に排水用の穴を開ければ完成です。紙パックですが、こちらは少し難しく、パックを切り抜き足場を作ります。屋根をつけたり、つり紐をつけたりを作り方の資料や見本を見ながら作業をすすめました。今回は参加者が少ないため、環境レンジャーのサポートも細かい点まで行き届いて、難しいところもうまく作り上げることができたと思います。

独自に餌の投入口を作ったり、可愛いシールで飾り付けて綺麗に仕上げた子供もいました。短い時間でしたが沢山のバードフィーダーが出来上がりました。参加者からは作り方の質問の他に「どんな鳥がくるの？」「鳥の嫌いな色は？」「ヒマワリ以外にはどんな餌がいいの？」という質問や「木の餌台を作りたい」などの声が寄せられました。これから冬に向かい野鳥の餌が少ない季節になります。餌を入れて庭先に吊るしてもらい、集まってきた野鳥の観察を楽しんでもらえたらと思います。

環境レンジャー活動報告（ネイチャーイン）
手賀沼船上冬鳥観察会

（ 環境レンジャー 野倉 元雄 ）

1/23（日）9:30、手賀沼公園ボート乗り場近くに集まったのは市民（大人、子供）29 人と冬鳥観察の指導をして頂く我孫子野鳥を守る会の 2 人、環境レンジャー5 人、手賀沼課 1 人でした。コロナウィルスのオミクロン株による感染増加が続き蔓延防止措置が発令されるなかですが、しっかりした感染防止措置をしたうえで開催することができたイベントです。

乗船する前に集合場所近くにオナガカモ、カルガモ、オオバン、ツグミ、エナガ、ハクセキレイが顔をだし、さっそく観察会が始まりました。例年は遊覧船 1 隻で開催する人数ですが密を避けるため 2 隻をチャーターし分乗して乗船します。桟橋を歩く途中では沖合にオカヨシガモの群れと杭に留まるミサゴを観察できました。乗船してから船は進路を西にとり、柏方面へ向かいました。

近づく船に驚いたオカヨシガモの群れが一斉に飛び立ちました。沼の岸辺の方を見るとコブハクチョウがゆったりと浮かんでおり、葦の生え際にはアオサギがたたずんでいます。北柏に近づいたころ船は反転し、東へと進路を変えました。大津川河口近くでは冬羽の美しいカンムリカイツブリの群れに会うことができました。ダイサギも岸辺近くで休んでいます。乗船した桟橋近くの沖合に差しかかった頃、多くの杭の一つにミサゴが留まっています。桟橋で見かけた後、飛び立っていたのですが、戻ってきたようです。近づくにつれミサゴは頭を上げ下げしているのでしっかり見ると足の爪の下に大きな魚を掴み食べていました。飛び立ったのは狩りに出かけたということがわかりました。船はそのまま東へ進み、手賀沼大橋に近づくにつれ我孫子市側の植生帯の杭に多くのカワウが休んでおり、更に進むとコガモの大きな群れに出会いました。手賀沼大橋をくぐり抜け、河童の像の頭の上に一羽のセグロカモメが休んでいるところを見てから、ハスの群生地であったあたりの上空にオオタカが現れました。手賀沼では時々見ることができます。

船は一路東へ進み何度もマガモの群れやコガモの群れに出会いました。カワウやカンムリカイツブリも多く見かけました。マガモの群れのなかにヒドリガモが混じっている場面もありました。やがて東の果ての手賀川に近づくころ、船は再度反転して手賀沼一周の最後の航路である手賀沼公園へと向かいます。

多くの野鳥が、食べ物をとり、ゆっくり休める場所を提供している手賀沼の自然の多様性の一端に触れることができました。乗船場所付近に戻って来たとき、ミサゴが未だ魚を食べていました。きっと満腹になっていることでしょう。下船の前に今日見た鳥を確認しあう鳥合わせをしてみると 28 種類の野鳥を観察したことがわかりました。文中で紹介したもの以外ではゴイサギ、キジバト、スズメ、カワラバト、ハシブトガラス、ハシボソガラス、トビ、ヒヨドリ、カイツブリ、ムクドリなどがあり、他の船ではカワセミ、ホオジロ、ホシハジロを見ていますので、両方あわせると 32 種類になりました。

環境レンジャー活動報告（環境学習）
紙飛行機工作と飛行大会

（ 環境レンジャー 佐藤 美次 ）

「紙飛行機工作と飛行大会」は例年 2 月に開催しておりますが、昨年（令和 3 年）はコロナ禍で中止となり今年も開催が危ぶまれましたがコロナウィルスの感染拡大に注意して参加人数を 20 名程度で 2/19（土）に「水の館」3 階の研修室で行いました。

「紙飛行機工作と飛行大会」は、チラシを再利用して作る 4 種類の紙飛行機①すいすい飛行機、②すうーと飛ぶ飛行機、③ふわふわ飛行機、④滑空飛行機と、ケント紙を使用した 2 種類の紙飛行機⑤曲技飛行機と⑥ホッチキス・ペグの計 6 種類の紙飛行機作成を予定していましたが、時間の都合で①を除く 5 種類を参加者全員で取り組みました。折り方の説明書を見ながら手早く折り仕上げてしまう人や折り方を何度も確認しながらサポートスタッフの支援を受ける人や壁に貼った折り方手順サンプルと見比べながら作り上げる人など皆さん真剣に取り組んでいました。一つの飛行機を作り終えると試し飛行をして飛び具合を見て翼を微調整して出来ばえを実感していました。

最後はホッチキス・ペグ飛行機の作成です。ホッチキス・ペグとはホッチキスで組み立てゴムを使用して飛ばすペーパーグライダーです。この飛行機は重心と翼のバランスが合えば 20 秒近い滑空が期待できるとあって大人も子どもたちも真剣に台紙に示された折れ線の山折り谷折りに取り組んでいました。出来上がった飛行機を持って戸外で試験飛行をしました。あいにく外は小雨が降り出し始めましたが子どもたちは大空に向けて飛行機を飛ばしていました。中には風を上手に受けて高く遠くへ飛ぶ飛行機もありました。最後にみんなで一斉に飛ばしてそれぞれの飛行機に歓声があがり盛況のうちに終えることができました。

みんな熱心に取り組みました(^^)/

２０２２（令和４）年４月１５日発行

環境レンジャーのこれからの予定

詳しくは「広報あびこ」を見てね！
お申し込み、お問い合わせは、我孫子市手賀沼課（04-7185-1484（直通））まで

令和４年４月１６日（土）
ネイチャーイン
『春の谷津の自然観察』

時間：９：３０～１２：００
場所：ＪＲ東我孫子駅集合

令和４年５月８日（日）
Enjoy 手賀沼 2022
『生きものぬり絵を楽しんで野鳥カードをゲットしよう！』

時間：９：００～１４：３０
場所：手賀沼親水広場

令和４年７月２７日（水）
環境学習
『遊覧船に乗って手賀沼を観察しよう』

時間：９：３０～１１：００
場所：手賀沼公園小池ボート乗り場前

令和４年７月３０日（土）
ネイチャーイン
『谷津ミュージアムでホタル鑑賞』

時間：１９：００～２０：３０
場所：ＪＲ東我孫子駅集合

令和４年８月４日（木）＆11 日（木･祝）
環境学習
『紙粘土で花びん等を作ろう』

時間：９：３０～１１：３０
場所：アビスタ工作工芸室

令和４年１０月２日（日）
ネイチャーイン（手賀沼流域フォーラム）
『手賀沼水辺探検！魚を獲って観察しよう』

時間：１３：００～１５：００
場所：手賀沼フィッシングセンター周辺

≪編集後記≫

桜が満開です。この時期、「花冷え」「花曇」「桜雨」「花嵐」など寒冷前線の通過で、春の気配がいったりきたりです。新年度、環境レンジャーは、いろいろなイベントを計画しました。ぜひ、一緒に体験してみましょう！

『たまっけ』へのご意見、ご感想お待ちしています。

（ 環境レンジャー 継岡 伸彦 ）